
年上のおねーさんは好きですか？

猫虎トラネコまねきねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上のおねーさんは好きですか？

【Nコード】

N0832BA

【作者名】

猫虎トラネコまねきねこ

【あらすじ】

今回も年下少年物です

幼稚園からの長いあこがれと恋愛

こどもを武器に年上のおねーさんに積極アピール

純粋さと狡猾さが交錯中

そんなかねつぐ ゆうとくん

好きですか？おねーさん？

ゆづと 5さい こいにおちた！

「ぼくの名前は、かねつぐ ゆづと5さいです」

おかーさんが他の人とお話ししてる時はとっとも長い

つまないから、もういこうよ

っていうのに、おかーさんはやめてくれない

ぼくが、遊んでるときにごはんだから、とかってすぐやめさすくせに
ずるい

でも、僕はみつけた

同じように、つまらなそうなかおをしてまってるおねーさん

だから、ちゃんといったんだ

はじめましてって

そしたら、おねーさんびっくりした顔して、にこりと笑って
ほめてくれた

らいねんは小学生なんだから

あいさつできるのはあたりまえなんだぞ

そういって、

「すごいね、ゆづとくん」

そういって、撫でてくれた

おねーさんはいい香りがした

だから、ぎゅって抱きついた

それからいっぱいいっぱいお話した

ぼくはおねーさんのことが大好きだ

だけど、おねーさんの名前をわすれちゃった
おかーさんにきいても

「あらあら」

なんてわらっておしえてくれない
ひどいよね

ぼくの好きな人なのにするいんだ
きつとおかーさんにとってもだいじな人なんだ
おとーさんみたいに

だから、まっつてね

およめさんにしてあげる

ぼくがするんだから、ちゃんとまっつてね

ゆづと 5さい こいにおちた！（後書き）

え？なにっ何ですか？その目は・・・ほら、久々に表のも書きたくなるじゃないですか

ほのぼのしたのとか・・・

浮気するな？現在のうわきものはどうしたと・・・あーはい・・・

まあ、同じご飯は嫌いなんですよ、味の違うものが食べたいというか
5話ぐらいで終わればいいなあ

ゆつと 6才 小学一年生!

ともだち100人できたっ

くらすが、30人だから、3つともうすこしで100人でも、だれがだれだかわかんなくなっちゃう

おねーさんのなまえみたいに忘れるのはいやだからみんなになまえかいてもらった

おかーさんにいうと、その中から大事なおともだち、親友ができるといいわねっていわれた

ふつづのおともだちと違うらしいじゃあおねーさんは?っていうと

うふふふって笑った

まだまだおねつねっていわれたけど、おねつなんてでてないや元気なのにへんなおかーさん

しばらくして、おかーさんのいったことがすこしわかった

あいつ、きらいだ

すぐなぐるし、どなるもんだからたたいてやった

でも、たたいからせんせいはだめよっていった仲直りのあくしゅした

ぎゅってされた、ちよっといたかった

でも、仕返ししたら、むこうのほうがいたそうだった

かった！

おねーさん守れるように強くなるんだっ

ゆうと、9才 小学三年生

みつかった！おねーさん発見

おねーさんは、中学生だった

名札をみたら、峰山ってかいてた

頑張っておぼえて、おかーさんに聞いたら答えてくれた

おねーさんは受験生とかいうのらしい

だから、邪魔しちゃだめよって言われて気付いた

おかーさん、おねーさんのこといっぱいしってる
ずるいよ

おかーさんは、秘密するんだって
泣いた、いっぱい泣いた

あとから考えたら凄くかつこわるかったけど
でも、おかーさんはずるい

ずっと探してるのしってるのに秘密にするから

おとーさんに言ったら

「あー」といって、こまった顔した
どうしたんだろう

「ゆうとは、男の子だろ

おねーさんは女の子だろ

だから、一緒に遊べないんだよ
」
っていわれた

そんなこと聞いてないけど、

かなり残念だった
なんだよ、一緒に遊んでくれたらいいのに

それから、少しおねーさんと話した
でも、おかーさんにみつかるよ、すぐに連れて帰られた

「もう、受験生なのにごめんなさいね
ほほほほ」

とか言っつて、僕にも少しお小言

「邪魔しちゃだめ」
っって言われた

だから、挨拶するだけにした

おねーさんは、小さく手をふってくれた
につこりわらってくれる

わらってたほうが可愛いのに、なんでわらわないんだろう

でもいいや、いっぱいいっぱい笑うのは
一緒にいる時で
ね、おねーさん

裕人、12才 小学六年生

峰山祥子 それが、おねーさんの名前だった
3年間、おねーさんと毎日学校にいけた
中学校っていい所だった

今年はまた受験生だから大変らしい
大学に行くから、もういつしょにいけないね
って言われて寂しくなったけど
おねーさんも一緒にいたいだから、
黙ってだきついた

おかーさんみたいに、おっぱいができて
気持ちいい顔をすりつけると、おねーさんはまっかになる
オレよりこどもっぱい所がある

しょーこつてよんだら、怒られた
自分の名前が嫌いなんだって
だから、おねーさんってよんでるけどなんで嫌いなのかな
いつか聞きたいっておもった

毎日抱きついてるけど、おねーさんはやっぱりいいにおい
でも、ちよつと細い
おかーさんみたいに、ふわふわしてない
なんでだろう

おかーさんは、やせたいやせたいっていうけど
いっぱい食べてる
おねーさんはいっぱい食べれないのかな？

サッカーでゴールしたこと言ったら

凄いつて手を叩いてくれた

オレはサッカーチームに入ってるから強くて当然だっていうと
いっぱい練習してるたまものだねって言われた

たまもの意味がわからなかったけど

たまだから、サッカーのことだろう

おねーさんは、サッカーのことあんまり知らないみたいだ
まあ女だからしかたないか

今日は、キスした

真っ赤になった

おねーさん大好きだよってちゃんといたら

ありがとうっていったのに

駄目だったのかな

でも、次の日ちゃんといつもの所で待っていてくれたよかった

テストの成績が悪かった時、公園で、少し教えてくれた

先生よりわかりやすかった

おねーさん先生みたいっていったら、嬉しそうだった

おねーさんの夢なのかな

そういえば、そう言う話ししてくれない

将来の話は大事なのに

こまったおねーさんだよ

裕人、15才 中学3年生

ハッキリ言おう、受験生は地獄だった

峰ちゃんは、勉強ができる人だから、国立大学に言った

正月に帰ってきた時に、メールアドレスをゲットしたから

たまにメールできる

でも、自分の携帯はないし、親のパソコンなので、おねーさんから
のメールは全部消してる

峰山の家のことを調べた

おねーさんは、前妻の子っていうことで、あまり家族の仲が良くない
父親は一緒だけど、母親が違うから、仲良くできないらしい

あの日、連れてきてたのは、おねーさんに荷物を持たせるのと
たぶん何かの特売だったんだろう

他のガキではだめだったから、おねーさんを連れて行ったのだと
今なら推測できる

久々にあつた、峰ちゃんは綺麗だった

今、つきあってる彼女なんて目じゃなかった

一応彼女はいるけど、向こうからつきあってって言われてつきあっ
てるけど

あのおねーさんへの恋心に優るものはない

それに、可愛いとは思っけど、正直、おねーさんにはかなわない

1年の時、同じように抱きついてても

駄目っていわれなかったけど

2・3年は帰らないっていわれて寂しかった

まあ、帰って来たくないと思う

オレが気付いてからも、あの家は結構荒れてる
おねーさんの弟は、不良もどきになったし
その下の妹はかなりわがまま

なんか、オレが好きとかいってるけど、論外
でも、峰ちゃんと結婚したら、あいつ兄弟になるのか
とおもったら、ちょっと気持ち悪い

これが生理的嫌悪ってやつだろうな

あ、ちなみに、ネタは、基本おねーさんです
補填材料は今の彼女の肉体だけどね

彼女をOKしたのは、ちょっとおねーさんに似てたからっていつものと
彼女なしとかつまんないから
でも、それなりに大事にしてるつもりだけどね

なんだろう、好きだけど、恋できない
友達みたいなカップルっていうのかな

だから、まあ、それはそれでいいと思ってる

あこがれだけで終わる恋かもしれないし
でも、終わりそうにない自分がちょっとやばい

裕人、15才 中学3年生2 夏休み

受験生は勉強しなさいって
ヒステリックに叫ぶババアこと、母親は置いといて
愛に生きるぜ

というのは半分本気で、半分冗談

峰ちゃんの住む、東京にやってきました
つていつても、電車で1時間から2時間内だからそう遠くはない
なのに、峰ちゃんは帰ってくることはない

去年までは、女子寮で暮らしていたらしいけど
今は、一人暮らしをしてるって聞いて
行きたいって何度かお願いしたら
オーケーしてくれた

電車の改札には峰ちゃんの姿
数年前と変わらないワンピース姿の峰ちゃんだった

「峰ちゃん」
大きく手をふるると、小学生の時みたいに小さく手を振りかえしてく
れた
やっぱり、変わらないなと嬉しくなる

オレも相当変わって、でも変わってない
手を振りたくなるのも、抱きつきたくなるのも
でも、もう峰ちゃんより、身長が高くなったから、胸にダイブはで
きない

まあ、違う意味でダイブしよう

それとも峰ちゃんはバージンロードはバージンのまま歩きたいなら
それだけは我慢するけど

もしバージンじゃなかったらシヨックだけど

オレも彼女いたし、そういう関係にもなっただから、峰ちゃんを責
めたり出来ない

「ゆうとくん、恥ずかしいよ」

ぎゅと抱きしめて、オレの胸あたりでもごもごいってる

あはは、可愛い、激かわいい

「いいじゃん、逢いたかったんだし」

そういって、手を握ると、握りかえしてくれた
ちよつと冷たい手だった

「寒いの？」

そう聞いたら、峰ちゃんは恥ずかしそうに笑って

「ちよつと緊張してるの」
っていわれた

うわっ嬉しい、これって男として意識されてるってことだよな？

「だって、来るっていったけど

来ないかもしれないでしょ？」

え？何それ、口先だと思われた？

オレ、峰ちゃんの中ではチャラ男なの？

「オレ、峰ちゃんとの約束だけは守るけど？」

心外だっという気持ちが出てみたいで

オレの声は、自分がおもったより、冷たかった

「い、ごめんなさい、そういう意味じゃ
じゃあ、どういう意味だよ
って聞きたくなっただけど、小さくなった峰ちゃんを見て
何も言えなくなった

「もー、峰ちゃん」

そう言っただけはもう一度抱きしめた
ああ、やっぱりいいにおい

「ゆうとくん？」

小さくなった体が、少しだけ解れた
「ぎゅっとして？」

小さな子みたいで、ちょっと恥ずかしいけど、そういうと峰ちゃん
は必ず抱きしめてくれた
今もそうだった

「ごめんなさいして？」

オレは言う

「ごめんね、ゆうとくん」
きゅっ抱きしめられて顔は見れないけど、峰ちゃんは、優しい顔
をしているはず

「びっくりさせて、オレもごめんね

でも、行くって言ったら行くし約束は守るよ
守れない時は連絡するから、信じてね」

そういうと、峰ちゃんは、うんと言って頷いた
さらりと揺れる髪、そして匂い
こつんと当たる頭

ああ、やばい、可愛い

「いこつか」

このまま行くと理性というより、下半身的にやばいので
離れてもう一度手を繋ぐ

「うん、いこつかこつちだよ、ゆうとくん」

さっきの効果もあって、峰ちゃんは、昔不名誉ながら迷子になった
時みたいに

連れて行ってくれた

かなりのぼろアパートに

「ふ・・・古いでしょ？」

うん、なんか、レトロ口通り越して、むしろぼろ

「すげえ、こんな家末だあるんだ」

オレの正直な感想を許してほしい

「でもね、ちゃんとお風呂もあるしおトイレもあるのよ」

あそっいや、テレビでないのもあるってやってたな

「でも、いいよな、こつ言っつ」

ぎしぎしいう階段、部屋と部屋の感覚は狭いけど

峰ちゃんから、知り合いばかりだって聞いた

「まじで、共同生活ってかんじじゃん

キャンプみたいでおもしろー」

っていったら、峰ちゃんにくすくす笑われた

「毎日だと飽きちゃうかもよ」

まあ確かに、でも、峰ちゃんの部屋は、物が少ないけど女の子らしい
綺麗な部屋だった

「ゆうとくん、泊まる所はこころへんなの？」

「チエツクインの時間とか大丈夫？」

「お茶をのんで、お互いの近況を聞いてというより、聞き出して一息ついた頃、初めての質問はこれだった」

「え？なんで？」

「峰ちゃん所泊まるのにホテルなんてとらないよ」

「え？」

「峰ちゃんがきよとんとした顔になった」

「オレ、ここ泊まるけど？」

「女子寮じゃないからいいんでしょ？」

「そう言くと、目に見えて峰ちゃんはおろおろしてるよし、この反応は男連れ込んだことない反応だ」

「駄目？」

「何も気付いてませんよー的な感じで聞くと、眉尻を下げた峰ちゃんだけ」

「お布団一つしかないよ？」
と折れてくれた

「夏だから、いらないし、床でいいよ」

「バスタオルぐらい貸してくれたらなおよしっ」

「男子のお泊まりなんてそんなものです」

「むしろ、一緒に寝たいけどね」

「そ、そんなものなのね」

「そういうと、タオルケットを出してくれた」

「これは余分があるらしい」

「うーん、どうなんだろう、やっぱ、誰か泊まるのか」

「と心配したら、峰ちゃんの布団は、普通の布団で、タオルケット使

つてないだけらしい
ああ、よかった、自分用だってほっとした

「数学からしよっか」

そう、一応の目標は、受験勉強
それと、会いに来ただけ

それからみっちり、教えて貰った
やっぱり、わかりやすく、峰ちゃんの声のせいかどどん頭に入
ってくる

意外とスパルタなのは、びっくりしたけど、
風呂から上がったら、いきなり、年号とか聞かれたり
寝起きに記憶した古文とか言わされるんだよな

最初は、全然駄目だったけど、
10日間のみっちりやってたら、なんか覚えられる脳になってた
聞かれたら、さっと引き出しがあいて、
そこから答えが飛び出して行く感じになった

峰ちゃんは、そのたびに凄い凄いつて、手を握ってくれるけど
両手で握るものだから、その間の胸がぶにぶに揺れて
それが見たくて頑張ってたのかも

結局そんな感じで10日間は終わった
家に帰って、塾の学力テストは段違いに上がってびっくりされたけど
よく頑張ったって褒められて、まんざらじゃない気分

よし、頑張るぞ
できる男になるぞ

裕人、15才 高校三年生

勉強を教えてもらって、やり方つてのが解った

そんな中学最後の夏から、また三年が過ぎ再び地獄の受験年となった
今回は、前回ほど甘くはない

1校は推薦を貰えるのは確定だろうが、確実にいけるとは限らない
センター試験でどうにかなる実力と運が必要だった

だから、オレはやっぱり逢いたかった

峰ちゃんに

あれから何度かあった、峰ちゃんはその度に迎えに来てくれて

遠距離恋愛中のカップルみたいで嬉しかった

峰ちゃんの部屋には相変わらず男の影はなくて

それを確認しにいってるのかと思えてきて

自分の信用のなさが情けなかったが

信用する以前に、まだつきあってないことが

もつと情けなかった

でも、峰ちゃんから話は聞けた

名前は呼ばれたくないってという話

祥子っていう名前

良い名前のはずなのに、不思議に思ってたら

前妻が置いていって【しょうがない子】だからしょうごらしい

だから、父親からも愛されずに育ってきたといっても過言じゃなかつたんだ

それなのに、峰ちゃんは静かに笑ってた

一緒に学校にいけてたのしかったよ
ってそう言ってくれたのも嬉しかった

少しずつ距離を縮めて、オレと峰ちゃんは
自然と恋人みたいだった

どっちかという姉弟のような家族かもしれないけど
一緒にいるのが自然な関係だった

だから、そのまま、結婚してもそんな生活ができるかなあと思うと
顔がにやけてくる

電車の中だっつーのに、ださいなあオレ

峰ちゃんだけには骨抜きにされて、
どうあっても大好きでしようがない

さてと、駅についた改札にはいたいた

「峰ちゃん」

手を振る、必ず振り替えてくれる

やっぱりいいわー、同年代の彼女と何度も同じことしてたら

絶対やめるもんな、他のことしたがったり

峰ちゃんは、そういうこと昔からなかった

根気良くオレの・・・ガキの話につきあってくれた

「やっぱり来たね」

教えることできないよ、大学受験はって言われたけど

逢いたいから行くの半分口実っていったら

電話の向こうでくすくす、

耳をくすぐるような声で笑われた

「来るよ、峰ちゃん分補給」

ぎゅっと抱きしめると、峰ちゃんが笑った

「じゃあ、私も、ゆうとくん分補給」

きゅっと抱きしめ返す体付きが、すこしふっくらとしてた

あ、良かったっておもった

料理は上手い峰ちゃんだけど、味気ない食事がいやだったらしい

だから、あんな家族でも、一緒に食べられるのが嬉しかったらしい

何度か逢ってたら隣の部屋の人とも仲良くなって

料理下手な彼女が、峰は最高の嫁だーとかオレより男らしい台詞はいて

一緒に飯食うようになったらしい

ムードメーカーの彼女だから、友達の少なかった峰ちゃんに友達も増えて

今は、同じところではたらいてるらしい
つても学校の研究員らしいけどね

まあ、その人にはオレの好意なんてバレバレで

変な虫がつかないように護ってあげるよ

って言われて安心した所があるが

一番の敵にも思えてしかたがないところもある

あいつ、レズじゃねえよな

峰ちゃん触る手つきがオツサンすぎる

部屋への道珍しく峰ちゃんから近況報告が始まった
話すのが格段に上手くなって、聞いてておもしろい

プレゼンとか、研究発表でなれたかな
って照れ笑いしてたけど、あいつのおかげかもしれないと思う
そういう意味でオレはまだまだガキだった

「いいじゃん、何にせよ出来るようになるのは
勉強の仕方、マジで世話になってるし」
そう言うと、飲み込みが早いから私も楽しかったよ
って笑った

うん、いい先生
オレは褒められて育つ生徒です

ちなみに今の季節は冬
だから、もうすぐ結果の年になる

「寒いから、ホテル取ったよ」
「そうなの？じゃあ、お布団いらなかった？」
あれ、用意してくれたのかな
「ちかちゃんのなんだけど、貸してもらったの」
「ああ、あいつのか」

「んー、どっちも要らないかな
峰ちゃんも一緒に泊まるから」
そう言うと、えっと固まり
その後真っ赤になった

「だから、今日はこっち」
手を引いて、ホテルに到着

うう、オレの金さようなら
でも、プロポーズはやっぱりホテルだろ

「ゆうとくん、それはちよつと・・・」
「え？」

オレはきよとんとした顔をして振り返った

「いつも一緒だから、たまには外でもいいじゃん」

そう言つと、真っ赤な顔のままちよつと小さくなった

やだなあ、峰ちゃんのえつちー

まだそんなことしませんよ

男とホテル＝な公式ができあがってるのはまあいいけど

それで、いやがるから

ますますセーフです

オレよかったね！

「一緒に寝たかったからダブルにしようかとおもったけど

寝相悪くて蹴飛ばしたら悪いからツインにした」

そう言つと、こくこく頷いて

「それがいいと思うよ」

うんつて、必死な感じがすっげー可愛かった

ますます男として意識してくれるのかな

峰ちゃん、狼にまだなりたくないんだよ

もう少しだけ、子供でいさせて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0832ba/>

年上のおねーさんは好きですか？

2012年1月2日11時49分発行